

日本大学経済学部経済科学研究所研究会

【第181回】

2011年11月10日

公開月例研究会

行動経済学から見た社会保障のあり方

国立社会保障・人口問題研究所所長 西村周三

西村といいます。書くとき難しいことを書くけど、話すとき簡単な話をする人間です。よろしくお願ひします。

レジュメをご覧になる限りちょっと難しいですね。こういうのを書くときはどうしても、学者先生が「おまえの話はいい加減だ」と言われなにか心配になって、厳密な書き方をしてしまいます。しかし、話すのは消えるし、ちょっと粗っぽい議論のほうが分かりやすいと思うので、この1時間、なんとか難しい話をしないようにしようと思います。

このレジュメを見て、なぜ私のこれからの話が難しく思えるかという、実は経済学が難しいからです。たとえばミクロ経済学で「消費者行動最大」とか言うけれども、日常生活で私たちそんなこと考えてないよな、と思う人が圧倒的に多いですね。人々の日常の行動を適切に描写しないのが経済学で、今日は幾らのお弁当を食べようとか食事どうしようかという話をするとき、考えていないようなことを経済学は教える。だから難しいのです。

私は今日の講義で、日常の私たちの行動に即してお話をしながら、しかし経済学で勉強すべきことをしっかり分かっておかないと困るんですよという話をします。簡単に言うと、合理的に人間が行動するかどうかということです。

「合理的」という議論には2つ難しい点があって、毎日毎日、私たちはいろいろなことをやっています。経済の話で言うと、おカネを使っているいろいろな物を買ったり、バイトして給料をもらったりしていますね。そのときどういう気持ちでやっているかという、ほとんどの人はそんなに深くは考えないでやっている。ところが、深く考えないで、何も考えないでやっています、では学問にならないわけです。

皆さんも給料をもらうために就職する。就職するためにはどういう就活をするでしょうか。みんな大企業に入りたがるのでなかなか就職できないけれども、小さいところを探せばそんなに難しくないんだよという話をよく聞くとおもう。「そんなこと言われても、実際大企業のほうが給料いいじゃん」と考えるというのは、ある意味合理的で、私が言っている「合理的」というのはそういう意味です。中には「おれは給料は低くてもいい

や。この会社の社長が気に入ったから、この会社に賭ける」と思って就職する人もいます。これはある種、非合理的です。

このどちらがいいか、そんな議論をしても意味がないわけで、学問というのはある程度合理的にやるということを前提に経済学はできてきました。ところが最近、行動経済学というのが出てきて、人間はそんな合理的に行動しませんよという話をするようになりました。

人間は非合理的にも行動します。しかし、非合理的に行動するということでは学問が成り立ちません。そこで経済学は「合理的」に固執するわけです。ところが、行動経済学というのは面白い学問で、後で本を紹介しますので、興味があったらごらんいただきたいと思いますが、私たちは「非合理的行動に法則性がある」ことを見つけることにある程度成功しつつあります。

簡単に言えば、「みんな同じ間違いを繰り返すんですよ」という話に注目するのが行動経済学です。10回いろいろなことをやって9回成功して、1回たまに間違えとかそういうことではなくて、みんな同じバタンの間違いをする。いろいろなことをやって、そのうち例外的に間違え、それを扱うは経済学ではなくて文学の世界です。「こういう変わった人がいて、こういうバカなことをして、なのにうまくいったんだよ」とか、「面白いやつがいてね、どう考えてもここでこうするほうが得なのに、一人違う損なことをして、後で成功したんだよ」というような話はいっぱいあります。それは文学でやればいいことで、経済学では扱わない。ところが、「多くの人が同じような間違いをするんだよ」というのは学問になりますというところで、それを扱うのが行動経済学です。

いま民主主義社会が大変なことになってきていますね。ギリシャのこと、皆さん知っていますか。あんな借金を抱えて、ヨーロッパのお荷物になっているのに、ギリシャ国民はその借金を返すために税金をたくさん払うとは言いたくなくて、デモをする。周りの国からすると、なんとバカなやつと思いますね。そのバカなやつが集まって、選挙で投票してバカな人を選ぶから、どうしてもバカな状態が続く。

それなら民主主義以外で何かこの世の中をうまくやる方法があればと、誰だって一瞬考えるので

すが、民主主義以外はもっと悪い結果になります。誰かに期待して、あの人をお願いしたらなんとかなるだろう、オバマさんをお願いしたらなんとかなるだろうと思ったら、オバマさんになっても、アメリカ経済はどんどん悪くなりました。日本では、民主党をお願いしたらなんとかなるだろうと思ったら、どうだったでしょうかね。それは、民主主義に限界があると同時に、誰か一人すごい人が出てきても、そんな簡単にはうまくいかないんだということです。

これからお話しすることは、「人間はいつもばかなことをする」という想定で社会の基準を考えることはできませんが、「こういうばかなことをみんなするので、その間違いはしないようにみんな考えてみましょうね」というのはありだということです。それが、私がさっき言った、「みんな同じ間違いを繰り返すんですよ」という話に注目しつつ、伝統的な経済学をしっかり勉強しましょうということです。

それを前提して、それでは具体的に、社会保障をどういうふうにしたらいいかという話です。本当はいっぱいあるのですが、一つの話を丁寧に説明するほうが分かりやすいと思いますので、社会保障の問題の一つの例を挙げて、行動経済学的な発想を取り入れて話をしようと思います。

その前に、経済学に問題があるということをもう少し言っておきます。私たちがいま学ぶマクロ経済学、ミクロ経済学は概して、経済的意味で自分の得になることをする人間を想定して教えます。実は必ずしもそうではなくて、合理的という言葉もなかなか難しく、経済的に損であることが分かっているても、私たちは「合理的」に行動することがしょっちゅうあります。

皆さん、今回の震災が起きたときに寄付しましたか。寄付というのは自分にとっては得ではありません。しかし、難しい表現をすると利他的と言いますが、自分の得ではないけれども寄付をします。ところが、利他的人間が行動するとどういうことになるかという研究はあまりありません。これは経済学の欠点で、これからは利他的に人間が行動するとどういうことが起きるかという研究を是非すべきだと思います。もしこれから大学院に行ってそういうことをやろうという人がいたら、私が絶対支えますから頑張ってください。

しかし、これも知っておいたほうがいい。今回、東日本大震災における寄付額は、海外からのものも含めて、金額的には数千億円規模です。ところが、いま日本で政府が損失補てんするために約10兆円予算化しようとしています。しかも、とても悲しい話で、日本の社会では私有財産を国の援助で個人に差し上げることは基本的に認められていません。表現は変ですが、焼け太りはしないように、厳しく法律で決めています。だから、津波が来る前の状態にほとんどの人は戻ることはありません。にもかかわらず、合計10兆円ぐらい要ります。

余談ですが、皆さん、大学の授業を受けるときに、先生が「3000億円と3000兆円はどれぐらい違うでしょうか」と言われたら、ハイと手を挙げて、「分かりません」と言いなさい。今日は先生方も何人かおられますが、「3000兆円は3000億円の1000倍でしょう。分かりますね」と言われるかもしれない。どっちにしても、ピンと来ませんね。3000円と3000万円の違いだったら、感覚的にちょっと分かるかなあ。それも分からんか。30円と3万円、これは分かりますね。「先生、そんな大きな金額で言わないでください。ぼくは直感的に分かりません。10兆円で何なのよ。なんでそんなに要るのよ。ピンと来ない」と言う人があたりまえです。

友だちが下宿していて、家賃を別にして月5万円要る。そいつが100万円貸してくれと言ってきたら、「おまえ、それは返せないだろう。だから貸さない」ということは直感的に分かりますね。そういう金額は分かります。ところが、10兆円要ると言われても、たくさん要るんだなあというのはもちろん分かりますよ。しかし、そういうときに、「先生、10兆円で、ぼく感覚的にどうしても分からないので、もうちょっと分かりやすくお願いします」と言うと、バカな先生は多分、0をいっぱい書いて、「これぐらいだ」と言うかもしれない。そんな0をたくさん書いてもらっても、余計分かりません。そうじゃなくて、これを国民1人当たり直すとどうなるとやってくれれば、少し分かりますね。それが先生の仕事ですから、それをちゃんと説明しない先生がいたら、皆さん、ぜひ質問しましょう。

寄付が2000億円で10兆円という、50倍ぐらい

になります。人間個人一人ひとりが利他的に寄付を一生懸命出しても、せいぜいこれぐらいしか集まらないというのが現状です。だから、利他的行動の経済学ばかりやっても役に立たない。政府がどうするとか、市場・マーケットがどうかということを勉強する必要があるということです。

以上が前置きで、これから私が話す行動経済学についての本を紹介します。一番分かりやすいのは真壁昭夫著『行動経済学入門』です。これか、多田洋介著『行動経済学入門』か、大学院へ行こうとする人は依田高典著『行動経済学』がいい。一番たくさん例が載っているのは友野典男著『行動経済学』です。

このようにいろいろな本がありますので、興味があったら図書館で借りて読んでください。私、実は去年、京都から東京に来たんですが、皆さん、恵まれていますよ。区立図書館に行ったら、みんなあります。2週間借りて読んだらいい。著者には怒られるかもしれませんが、買う必要はない。それは覚えておいてください。

従来の経済学ではあまりやらないことですが、利他的行動についての研究は結構進んでいます。贈与、利他性、相互性、誰かに助けてもらったから私もお返しをするということは世の中にたくさんあります。ただ、学部の教科書ではこういう話は出てこない。その理由の一端は、これだけでは世の中が回っていかない。震災にあってひどい目にあった人に対して、寄付だけではこの世の中は残念ながらうまくいかない。だからそれ以外の、政府が出てくる、あるいは市場というのが結構大事なものとして出てくる。

今回の地震の話に関しては、中川雅之先生が行動経済学を使って、こっちにちょっと地震に弱いけど3000万、こっちに地震に強い5000万のがあるって、同じ広さだとするとどっちを買うかというような研究をしておられます。皆さん、近い将来、豊洲のあたりでマンションを買うとして、どっちにする？

先生方の前でこういう話をすると不謹慎だと思われるので、先生方は聞かないで、若い学生諸君だけ聞いてください。いまのような話は経済学ではなかなか厳しい。私が京都大学にいるころ、「耐震性に弱い3000万のマンションと強い5000万のマンション、どっちにする？」と言ったら、ある学

生がハイといって手を挙げて、「先生、私は耐震性の強い3000万のマンションがいいです」と言う。「おまえ、アホか。世の中はそんな甘いもんじゃない」という話をした。

これが経済学で、残念ながら厳しいです。もちろん3000万で耐震性の高いマンションがいい。しかし、それがなくて、どうするかという選択に私たちは直面します。

さて本論に行きます。実は今日の話はこれに尽きますが、公的年金給付に物価スライド制を適用することの妥当性についてです。今日高齢者の方も結構おられる前でこういうことを言うのはつらいんですが、この20年間、日本経済は全くよくありません。給料はほとんど上がっていません。若い人の正規雇用の率はどんどん下がっています。若い人にはとても厳しくなっています。ところが、年金をもらっている高齢者の年金は20年前からほとんど下がっていません。経済はよくないのに、年金だけは下がっていません。若い人の平均の給料と高齢者のもらっている平均の年金を考えると、比率として高齢者の年金が相対的に増えています。増えてはいませんが、若い人の給料が下がっているんで、若い人の平均給料分の高齢者の平均年金は上がっています。どうしたらいいんでしょうという問題が一方である。

そこに、物価が下がってきています。物価が下がって所得が一定だったら生活水準は上昇しますので、高齢者の生活水準は上がっているはずですね。私たちがこれまで勉強してきた経済学ではそうなるはずで、物価がどんどん下がってきたといっても極端でないから難しいんですが、たとえば極端に物価が半分になったら、毎月7万円の年金給付で暮らしていた人は年金が変わらなければ倍の生活水準を維持できますね。どうですか。不思議そうな顔しないで、うん、うんと言ってください。

ところが、これが意外に難しく、概して言うと、物価の変化に対して若い人のほうが適応能力があるんです。吉本佳生先生の『スタバではグラナダを買え』というのがありますが、スタバでコーヒー1杯買うと、その日じゅうにもう1杯買えば100円で買えるというチケットをくれるというのを知ってる？

これをどうやって使うか、言わなくても分かりますね。2人でスタバに行って、1人が買って、そのもらったレシートを持ってもう1人が買いに行く。それが見えるようにやると、店員が「違います。あなた、違う人のレシートを持ってきてでしょ」と言うから、1人が買ったレシートを持って2人で1回出て、もう1人がまた入って行ってそれを使えば100円になる。

ショートが300円で、容器を持っていったら20円引きというのを知っていますか。べつに私はこういうことが専門ではないんですが、そういうことをやることによって物価に対抗することができます。若い人はいろいろ工夫して、そういうことができる力を持っています。

ところが、平均的に言えば、お年寄りのほうはそういうことが苦手なんです。たとえば大型スーパーはとても安く物を売っているにもかかわらず、ある程度の所得のお年寄りはいまだに、大きなデパートの地下で食料品を買う人がいるんですよ。味は大して変わりません。ところが、「やっぱり〇〇の地下でなきゃあ」という人がお年寄りにはいるんです。だから〇〇の地下はあまり物価は下がっていません。私は去年から東京に住んでいるので、そこら中を回っていて、どこが安いとか実体験済み。しかも都心には100円バスが走っていて、豊洲まで行って豊洲のスーパーに行くと、すごく安くなっています。

そういうことを一生懸命考えて、物価が下がったことをちゃんと最大限に利用することができる人と、そうでない人がいる。実はその背景にはあたりまえのことがあって、これは大学で経済学の先生はあまりちゃんと教えてくれないんですが、物価水準は全ての人で異なるということ。

ある時期、高齢者用の物価水準、若年者用の物価水準、単身者用の物価水準というのを内閣府でつくったことがあります。ところが、ほとんど変わらないという名のもとに、いまはつくっていません。本当はこれからもっとつくったほうがいい。行政も年金をある程度下げようと思うのなら、そういう作業をしないとだめなんです。残念ながらやっていません。

こういう論争は本当にあったんです。菅内閣のときに、物価が下がっていくので年金を2%下げようという議論になって、菅内閣でやろうとしま

した。ところが、湯浅さんという派遣村で有名な方が反対していました。なぜかという、彼の説明はまさにこれです。そんなに簡単ではないんです。

そうするとどうすればよいかというと、物価が下がっているときに、そのことをちゃんと感知して適応能力を持たない人に対する特別な配慮をすることが必要であって、全体の年金を下げないというのはよくないというのが私の結論です。これは人間が合理的かどうかという話と関係しています。

それは皆さん、みんな違いますね。概して言うと、わりと裕福な家庭の子どもは物価の変化に対して敏感ではありません。そうでない子どもたちは、本当は敏感であってほしい。親からの仕送りが少なく大変だ大変だと言っているのだったら、そういうことにもうちょっと頭を使って、友だち同士で、「ここで安い売ってるよ」とか、「〇〇のカバンは早く並ぶと結構いいのが手に入るよ」とか、物価が安いところを探す。いま私は原宿にしょっちゅう行きますが、〇〇というカッコいい店があって、早く並ぶとカバンをくれるところもあるんですよ。そういうことを一生懸命やるというのは経済合理的な行動です。

ところが、学生と話していても、そういうことをちゃんとできる経済合理的な学生と、一方に、さっきのスタバのことも全然知らない、「えーっ？ そんなのあったの」という経済合理的ではない子がいます。どっちを友だちにするのがいいのか、これはまた微妙ですね。

皆さん、どうですか。経済合理的な友だちを一人ぐらい持っているのがいいと私は思いますが、そういう人間ばかりと付き合っていると、ちょっと変になります。たとえば合宿に行こう。どこの旅行会社がいいか、ネットでどこが一番いいか即座に調べてきて、「みんな、合宿はここへ行こう。安いぜ」というようなことを見つけた友人を一人持とう。しかし、そういうやつばかりと付き合っているとねえ。

お年寄りはいま孤独になっています。都心で住んでいるお年寄りに「買い物難民」が増えている。近くに店がない。だから物価が高いのです。それに対して、お年寄り同士組んで、「今日はあなたが買い物に行って、何と何を買ってきて」という、

友だち同士で生活費を安くあげる友人サークルをつくるのができれば、いまの話は若干うまくいきますね。そういう経済的にも合理的な行動をすることができるような工夫をする状況をつくらないと、概して言うと高齢者は孤立しつつあるわけです。もちろん過疎地ではもっと深刻です。

いまのような話を実は私はいま、東京都北区で実践しています。NPO法人にかかわっている若い学生さんがたくさん来て、高齢者のために買い物を代わりにしてくれるサークルも結構増えています。これは利他的行動として、とてもいい話だと思います。

昔と比べていま、まちのいろんな付き合いがどんどん減ってきています。これは決してよくないと思います。江戸時代には、例外はあったけれども、多くの日本人は助け合って生きてきた。

それが分かる話がたくさんあるのがこの本（渡辺京二著『逝きし世の面影』）です。最後にもう1回紹介しますが、びっくりするぐらい面白い本です。これを読むと、いまの世の中がほんとに寂しいなあということが分かります。江戸の終わりから明治の初めに、いかに日本人が幸せだったか。貧しいけれども、貧困ではなかった。貧困というのは貧しくて困ることですが、困ってはいなかった。みんなお互いに助け合っている。それを外人が見て、「なんで日本人はみんなあんな幸せそうに笑うんだろう」と不思議に思っている、そういう話がたくさん出ています。ただしこの本は少し厚い。こんなの読めないという人は、（双葉社スーパームック『過ぎし江戸の面影』を掲げて）こっちは絵入りで読みやすい。これも図書館で借りてきました。

これを読むと、いまの世の中はいかにお互いが孤立しているか。学生同士もそうだと思います。私たちの学生のころは、合理的な人間を一人見つけるのが大事で、試験前になると周りで自分よりも優秀なやつを一人見つける。授業を聞いていて全然分らないときに、誰が分かっているか見渡して、こいつと思ったら、「仲良くしようよ」といって、試験の前にいろいろ聞きに行くということをするれば、絶対得しますよね。優秀な人を見つめる努力には誰も損をしないけれども、いまの日本ではそういうのが学生同士でも少ない。ぼくらの学生のころは必ずいました。しかも科目ごとに

違う。出席率がよくても、全然分かっていないやつもいる。それを見抜くことが大事です。それは余談ですが、適応能力というのはこれからの時代、大事だと思います。

さて、物価が下がっているという証拠を後でグラフで見てください。（図1参照）

皆さんは経済学部の学生ですから、「最近の円高」と言われて、「何それ？」と言う人はいませんよね。円高円高と新聞、テレビ等で大騒ぎしています。しかし、経済を勉強した人間は、「これはちょっと違うよね」と思いながら聞いてください。

たとえばアメリカの物価は相当上がっているのですよ。そうしたら、日本のトヨタがアメリカで車売る場合、円高円高と新聞、テレビ等で大騒ぎしてほしくない。これを実効為替レート、実質実効為替レートという言い方をします。これが合理的な判断です。

しかしこれも、人間、そんな簡単にアメリカでどういうふうにも物価が変化しているかということを知ることはできませんので、普通の人は「アメリカで車売るのは大変になったなあ」と思います。それはべつにおかしくはない。しかし、そのことをちゃんと勉強する力を学生時代に持っておいてほしいと思います。アメリカでGMが値上げしているかどうか、私も調べていません。しかし、いまはそういうことをすぐ調べることができますね。調べると、ほんとに日本の会社が大変かどうか分かります。ある程度平均的な状況があるんだということは、経済学を勉強すると分かるはずですよ。

日米で見ると、一番円安だったのは2008年ごろで、これと比べると結構円高にはなっています。しかし、2000年ごろと比べると、いまは実効レートで円安なのです。中国もいま景気が加熱気味で、かなり物価が上がっています。逆に言うと、日本の会社は中国に物を売るのは、同じ物売っている場合、昔よりも簡単になっていると言えます。（図2参照）

時間の関係でこれ以上やりませんが、今回の講義でお願いしたいのは、合理的にもの考えるというのは一方で大事です。しかし、それはそんな

簡単にはみんな分からないんだよということを理解する必要がある。この両者の眼を持ってほしい。お年寄りはどうしても、物価が下がっても、そんな簡単には対応できないんだよということを理解してほしい。そのためにぼくらは経済を勉強して、「おじいちゃん、おばあちゃん、物価が下がっているんだから」という話を広めて欲しいのです。

私は昔から「人間関係の西村先生」と言われていまして、人と話すのが好きなんです。今日も終わったら皆さんを誘うかもしれませんが、都心で100円バスを待ちながら、おばあさんとしょっちゅう話をします。ぼくもおじいさんですがね、都心の高級マンションに住んでいる独り者のお年寄りが東京には結構いるんですよ。

去年、東京に来てびっくりしたのは、紀ノ國屋で梨1個500円。すごいなあと思って買いませんでしたが、そういうのを普通に買っているおばあちゃんがいるんです。「あんたね、安いものを探して、今度一緒に豊洲のスーパーに行こうよ」といって誘いまして、この間実際に行ってきました。そういうことをするのも、そのおばあちゃんの人生の話をいっぱい教えてもらうことができますので、勉強になります。

次に、これは皆さんにぜひ読んでほしいと思いますが、テレビにもいっぱい出ている大変人気のある方で、日本政策投資銀行参事役の藻谷浩介さんの『デフレの正体』という本です。いま非常に話題になっていますが、この人、経済学についてちゃんと勉強していない。なのに面白い。しかも、経済学者に対する敵意丸出しで、経済学者はろくなことを言わんと書いてあります。そこは間違いです。

彼が根本的に間違っていることは、さっきの話と関係しますが、デフレと不景気は違うという点です。運悪くこの10年間、日本は両方が同時に起きているので、そういうふうみんな思うわけですが、消費者にとってはデフレというのはべつに悪いことではありません。皆さんがこれから就活するときも一緒です。昔と比べて初任給は全然上がっていないと思っても、物価が下がっているんだから、実質は給料は上がっているということになるんです。ところが、さっき言ったようなことができないとだめですね。つまり、高いものばかり

買うくせがついた人間にとってはだめです。この方はそういうことを一緒にくたしておられる。

日本経済はめちゃくちゃ悪いわけではないのです。20年間、経済はよくなっていません。よくなっていませんが、同時に物価がかなり下がっている。生活水準はそんなに下がりはしていない。ただ、個人によって違いますから、贅沢品ばかり買う人にとっては物価は全然下がっていません。ただ、最近ちょっと調べたのですが、ヴィトンのカバンも結構下がっています。それは余談で、これ以上やりません。

特にこの本で問題なのは、「三面等価の法則は間違っている」という話をこの人はしていますが、実はこれは経済学の基礎が分かっていない例です。しかし、この本を読むと、地方の疲弊というのが分かります。つまり、東京は例外的になんとか景気を維持しています。日本全体は不景気でよくないのに、東京都の税収はわりといいから、さっきも言いましたように東京都の図書館は結構充実しています。ところが地方に行くと、いま本当に悲惨な状態です。地方は、デフレよりも、どっちかと言うと不景気のほうに大きく左右されているというのが現状です。

それはなぜかということはこの人は説明しています。彼の答えは単純明快で、分かりやすく、正しい。理由は何かというと、高齢化。つまり、生産年齢人口がどんどん減っている。生産年齢人口の減り方が特に地方のほうに激しい。東京周辺はまだ人口が増えているし、若年労働力が増えています。ですから若い人の割合は多い。地方のほうは若い人が少ない。だからどんどん疲弊していくという説明をしています。

しかし、ここから先は皆さん一人ひとり考えてほしい。日本はただ従来と同じ物を同じようにつくって経済を維持する時代から、これからは中国などに対抗しようとすれば、頭の勝負です。一番有名な話として、なぜ日本でiPod、iPadをつくる人が出てこないんだという話をします。

最近亡くなったスティーヴ・ジョブズは結構は個性的な人間で、協調性のない人間だということで有名です。ところが日本人は、若い人も含めて、みんな協調性に富んでいる。私もそうで、「協調性の西村」です。協調性があり過ぎて、周りとかケンカするなんてことはできない。

しかも、なぜiPod, iPad, iPhoneがあんなに売れたかという、すごいい物をつくったからという、その「いい物」の中身は、べつに画期的にカメラの解像度が高いとかそういうことに成功したのではないという説が有力です。では何だというと、彼のプレゼン能力、彼が新製品を発表するときのやり方。みんなを、いまかいまかと待たせて、iPhone4は次はどうなるんだと言わせておいて、突然あのおじさんが出てきてカッコいいことをやるわけです。そういう能力って、べつに歳と関係ないでしょう。

どうでしょうか。これは皆さんの研究テーマです。今日、ある程度お歳を召した方もおられる。若い人もいる。しかし、iPhoneを上手に売る能力という意味でいるんな人がいる。製品の本当の中身は、ソニーが売り出した商品と比べて、べつにすごい性能が高いわけではない。ただ、美的感覚とかプレゼン能力とか、魅力的に見せる力がすごい。

先ほどの藻谷さんの「地方は若い人が少ない。だからどんどん疲弊していく」という説明を思い出してください。実は人間の知恵、頭を使う能力—学歴とは関係なく、上手な商売の才能という言い方でいいです。そういう力に秀でた人がいたら、その地方は結構うまくいくんです。「一太郎」をつくった徳島のジャストシステムというのはすごいですよ。そういうところがいっぱいある県は、藻谷さんの話の例外になっているんです。

「若い人が減ると経済がだめになる」というのは、平均的には正しい。高齢者は力があっても強制的にリタイアさせられますから、有効活用してないのが現状です。それを有効活用し、さらにそれぞれの県の特産物を上手に使うともっともっと伸びるよ、というような話をしてくれると元気が出ますね。ところが、これを読むと、「そうかあ。高齢化したら日本経済はだめかあ」と思ってしまう。一言で言うと、産業構造がどのように変わるかという発想が、この藻谷さんの議論では少な過ぎる。これがこの本の欠点です。

私は京都大学で教育担当副学長をしていたので、いまの大学生の就活について大変興味があり、同時に相当勉強しました。今日のテーマとは関係ないのでやりませんが、後で「先生、就活はどうしたらいいでしょう」という質問があったら

答えますけれども、産業構造がどのように変わるかという発想が大事です。

就活のときに勉強する本としてとてもいいのが経産省の「産業構造ビジョン2011」です。これからどういう産業が伸びるかという話を、結構勉強して書いています。ここで誤解してはいけないのは、新しい産業は必ず新しい会社から出るとは限らない。既存の会社でも伸びるかもしれない。オ、そういうことをこれを読んで勉強して、どういう業種に就活するといいかたと考える参考になると思います。

ただし、経産省も考え方が甘い。時間の関係で飛ばしますが、社会保障の医療の分野での議論は粗っぽすぎる。

さて、年金の話に戻りますが、いまの日本の年金制度は過去、どんどん経済が成長するということを前提として、厚生労働省がいい加減なやり方をしてきましたが、一理はあるんです。なぜかという、私はいま66歳で、27歳で大学院を出て就職して、そこから年金を払いだしました。最初払ったのは4000円で、27歳から66歳まで、ほぼ40年間払ってきた。仮にいまから20年間生きるとして、これからもらえる年金の金額を計算すると、問題なしにこれからもらう額のほうが過去40年間に払った額よりも多いです。そこをもって、学習院の鈴木先生たちや、うちにいた加藤先生も『世代間格差』という本を出したばかりです。

確かに私がもらう年金は私が払った金額よりもはるかに多い。そうすると何が起きるか。ぱっと考えたら分かるように、若い人は損をする。自分たちが払った年金は年寄りにみんな取られると思うのは自然です。

でも、ちょっと考えてごらん。私が27歳のときに払った4000円は、給料3万円ぐらいのときに払った年金保険料です。それを、「利子を忘れると、4000円払ったのが8000円になって返ってきたら元が取れる。では年金を8000円にしましょう」と言われたら、それはないぜと私は言いたくなります。

なぜそういうことが起きたか。それは経済が成長したから。給料がどんどん増えたからです。このことをほとんどテレビも報道しませんが、これからの君たちが年金がたくさんもらえるかどうかは、君たちがこれからどれだけ稼ぐかによって変

わってくるんです。はっきり言って、年寄りとは関係ない。君たちが稼ぐことができなかつたら、確かに君たちに返る額が少なくなります。それは私たちもそうで、私たちが一生懸命働いて経済を成長させたから、だからたくさんもらえるようになっただけであって—というの是一面的な言い方ですが、そういう経済との関係を冷静に見るということはとても大事です。

さっきの行動経済学の言っていることで、「人間はどうしても済んだことにくよくよしがちなのか」という議論があるですけれども、済んだことは冷静に振り返って、客観的にそれを冷たい眼で分析する必要がありますが、それを将来の決定に引きずってはいけないというのが合理的行動です。ところが人間はそうではないよというのが行動経済学で、これは経済だけではなくてあらゆることに適用できます。

ある人が好きになって、必死になって彼、彼女を追いかけたのに、最近振られた。そのとき皆さん、どうする？ なんとかできるだけ懸命に頑張っていて、短い時間であきらめるようにしましょう。それはできない。できないから非合理的。できないけれども、敗因をしっかり分析して、なんでおれは、私はあの人に、あいつに振られたかという分析はしっかりやるが、それをしっかり冷静に判断して、あしたからは次に向かって頑張ろうというのが合理的。

それができないよというので、後悔回避。あいつが悪いんだ。あいつが悪いから私が振られたんだ。あれはおれのせいじゃなかったんだと一生懸命思おうとする。思おうとするけど、やっぱりあいつは素敵だなとなる。そのときに合理的に判断するというのは、そういう後悔はできるだけすっかり忘れるというのが、行動経済学が教えている合理的行動がいいよという話。

済んだことをくよくよしても始まらない、その具体例をお話ししたいと思います。株の話で、「ある金曜日の夕方、ニューヨーク株式市場で株価が暴落したことを知った。相当数の日本株を持っているAさんは不安になっているんな方面の専門家に日本の株価はどうなると思うか問い合わせしてみた。結果、多数の意見は『一時的には株価が下がっても、早晩回復するので、そんなに心配することはない』という意見だったので、これを信用

することにした。この人は月曜日の朝、どう行動すべきか」。

この正解は次の3つのうち、どれでしょう。「(1) 何もしないで、しばらく様子を見る」、「(2) 自分の持っている株を売る」、「(3) さらに買い足す」。そのときの一番大事なところは、「一時的には株価が下がっても、早晩回復するので、そんなに心配することはない」と言われて、これを信じたということです。皆さん、どうする？

時間がないので答えを言います。私は合理的ではないので、(1) 番でいきます。しかし、これは合理的ではない。「一時的には株価が下がっても」というんだから、合理的には(3) 番で、買い足したらいいのですよ。

こういう話はセンスのいい人は一瞬で分かる。分からない人はなかなか分からない。これが分からなくても、バカではない。経済的なセンスがあるかどうかです。さっきから言っているように、世の中、そういう経済的なセンスを持っている人が立派とは限りません。そういう友だちは一人だけ持ったらいいということです。この3つのうちのどれが答えであっても、あなたがバカではない。これははっきり言えます。

これは株式の世界でちょっと難しい応用問題で、もっと簡単な話としては「損切り」の問題がある。あるとき1株100万円の株を買いました。それが80万円に下がりました。そのとき証券会社に「お客さん、100万で買ったのが80万に下がりましたね。悔しいでしょう。だからいま買ったら90万で買ったことになりますよ」と言われてそうするというのが損切りです。

よく考えたら、済んだことをくよくよしても仕方がないし、それには何の根拠もない。ところが、人間悲しいもので、80万で買って自分で自分の心を納得させようとする。友だちに「おれ、株で損したのだけど、でも実際は90万で買ったのが80万になったぐらいだから、まあいいやと思ってるんですよ」というぐらいならいいけれども、「100万で買ったのが80万になった」というのは恥ずかしくて言えない。それで損切りをする。これはよく考えたらアホです。経済的にはアホで、何の根拠もありません。合理的な答えは、80万になったとき、そこから反転するか、もっと下がるかによって決めるという、非常に簡単な話です。ところが、

人間はなかなかそれができないという事例で、実はこれが経済の成長と関係しています。

もう1つは「消費者余剰」の話で、先生も分かっていない先生が多いので、「先生、それは違いますよ」と頑張ってください。私たちは、標準的だと思っている価格と比べて安かったら得をすると思う。スタバの話で私は学生諸君と議論したことがあります。スタバ320円、ドトール280円で、若い人たちはみんな、「これからはスタバが伸びる。ドトールはだめ」と言う。「なんで？ ドトールは280円でおいしいよ。スタバは320円。なんでドトールを買わないの」と私が言ったら、「先生、ふるーい。ドトールはダサーイ。スタバのほうがカッコいいから、20円、30円高くても、こっちのほうがカッコいいじゃん」というのが若い人の意見でした。皆さん、どうですか。

そのときに、320円の値打ちがあるかどうか。400円でもいい、600円でも買ってでもいいという需要曲線のつくり方の説明があって、それで皆さん、納得しますか。実はそういう問題じゃないんです。普通の非合理的な人間の発想は、ここで300円で売っているのがよければ、こっちで250円だろうが400円だろうが、高かろうが安かろうが買うという、非合理的な行動をするわけです。

ほかにも有名な話はいっぱいありますが、時間の関係で省略します。こういう錯覚もこれから社会保障を考えるときに上手に使うことが可能ですよ、行政もセット販売をちゃんとやるといいですよという話をしたかったんですが、余計な話をしたので時間がなくなりました。

さっき後悔回避という話をしましたが、経済学では後悔はない。人間は合理的なので、後悔しません。経済学では後悔はないんです。しかし、現実には後悔ばかりです。もちろん人によって違います。ビジネスで成功する人は、わりと後悔しません。くよくよする人間と、そうじゃない人間がある。他方で、くよくよする、後悔する・しないということと、過去を冷静に分析するというのは違うのだということをまず覚えてください。それははっきり違います。私が何度も言っているように、合理的に行動するためには後悔はしない。しかし、冷静に敗因はしっかり分析する。

体育会系の方、おられますか。これはほとんどのスポーツで言われている話です。たとえば野球

の試合をやって負けた選手にインタビューすると、「あそこでぼくがこういうことをしたのが失敗だったと思います」とはほとんど言わない。「今日のことは忘れて、あした頑張りまーす」と言う。それが勝負の鉄則です。「あそこであのとき三振した、あの最初の球をストレートと思ったのは失敗だった」ということを悲しがっていたのでは、人生、将来ないんです。しかし、冷静に「あそこで読んだストレートと思ったのは間違いだった。あのピッチャーはこういうパターンでこういうふう流れるんだということを学んだ」というのはあります。しかしそれも、そこに感情を入れるとよくない。「もっとこうあったらいいな」という感情はみな将来に持っていく。

ところが、残念ながら人間はなかなかできません。スポーツ選手はそう言っているけれども、実際はおそらく高校野球なんかでも、「おれがエラーしたばかりに、みんなに迷惑をかけた」といって寝られない子が多い。そのときにそのエラーをした本人が「みんな、あのエラーはたまたまだ。あのエラーは忘れて、あしたから頑張ろう」と言ったら、バカかと思われそうですよね。

人間は感情があるので難しい。ところが、いままでの経済学には「感情」が入っていない。冷静に物事を客観的に判断する、野球で言うと野村監督の経済学です。そこへ長嶋の経済学が入ってきた。何か分からんが、動物的勘がそこにある。英語ではanimal spiritとあって、そういう本も行動経済学の本で出ていますが、「感情」という要素を人間の行動に入れる経済学が行動経済学です。

残念ながらこれまでの経済学が考える社会保障制度には、失敗したときに、想定外のことが起きたときに、その悲しみにどう対応するか、悲しい思いをする人にどういうケアをするかという発想がない。これからの経済学の課題はグリーンケア政策を考えることだ。悲しいことが起きたときに、その悲しみに対してどういうケアをするのか、それはおカネだけではなくて、むしろ人間関係とか相談相手をつくるかそういうことがこれからはとても大事だ、ということで今日の話結びたいと思います。

あとは参考文献の紹介で、まず先ほどのこれ（『過ぎし江戸の面影』）です。江戸から明治にかけて、私たち日本人はいかに情愛に満ちた人間関

係を持っていたか、それによって私たちはとても幸せな社会を築いていたか、よく分かります。もちろん変な話もいっぱいありますし、女の人が平気で行水しているのを見て外人がびっくりしたとかいう話も載っていますが、大変面白い本です。

その上級編が渡辺京二著『逝きし世の面影』（平凡社ライブラリー）です。これの目次を見ると、第2章に「陽気な人々」というのがあります。日本は江戸から明治にかけて、いかに陽気な人々の集まりの社会だったか。いまの日本の社会はその陽気さがなくなって、みんなこわい顔をしている。

こういう話を学生諸君に言うと、「先生はもっと陽気になれと言ったので、お笑い番組をいっぱい見るようにしています」という人がいてびっくりしましたが、そういうことではないんです。人間関係、特に自分の周りの人間と陽気に付き合うことができる社会をいかにつくるか。お笑い番組を見て笑うのではなくて、自分たちの中でお笑い芸人をつくって、そこでみんなでワッハッハと笑う仕組み、社会をつくるのが大事で、これ以上は皆さん、お一人お一人考えていただきたい。

1つの大事なポイントは、いまのこの社会は過度に欲望を広げる社会です。欲望をどんどん広げると、それに到達しない自分が悲しくなります。そうではなくて、おれなんかどうせ、この大学を出ても大企業なんか入れないんだよと思えば、友だちをいっぱいつくって、こいつとこいつは出世しそうだから仲良くして、おれは中小企業に行く。ちゃんと出世しそうなやつを見つけて、同窓

会もしっかり世話をして、仲良くしておく。これが大事です。

「おれはべつに出世しなくてもいい。中小企業でもいい」と思うと、どんなに気が楽になるか。ところが、お父さん、お母さんは違います。教育担当をやった私の経験からいっても、最近はお母さんも「大企業に入れ入れ」と言うんです。そうではなくて、大企業ではなくても面白い会社に行行って、大企業に行きそうなやつを友だちに持つ。これは大事ですが、自分のはのんびり、ゆっくり、にこにこ笑って暮らせる会社を探すのがいいのではないかと思います。

とりとめもない話でごめんなさい。時間の関係で最後のほうは飛ばしました。これで終了したいと思います。

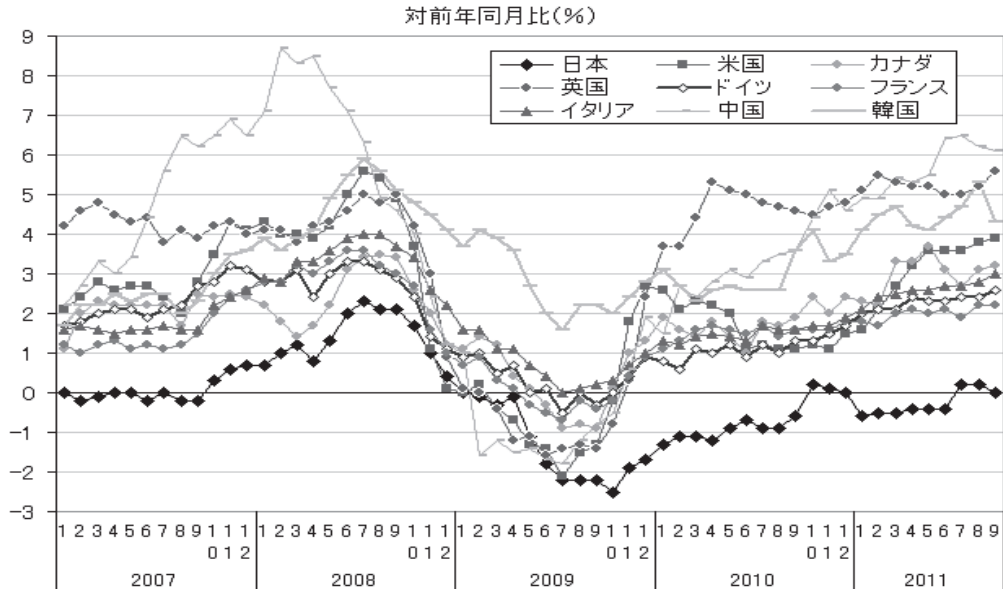
ご清聴ありがとうございました。

参考文献

1. 多田洋介『行動経済学入門』（日本経済新聞社、2003年）
2. 友野典男『行動経済学』（光文社新書、2006年）
3. 依田高典『行動経済学』（中公新書、2010年）
4. 真壁昭夫『行動経済学入門』（ダイヤモンド社、2010年）
5. 吉本佳生『スタバではグランデを買え』（ダイヤモンド社、2007年）
6. 渡辺京二『逝きし世の面影』（葦書房（福岡）1998年、和辻哲郎文化賞受賞／平凡社ライブラリー、2005年）
7. 双葉社『過ぎし江戸の面影』（双葉社、2011年）

図1

主要国における消費者物価指数の動き



(注) 英国は小売物価指数。イタリアはたばこを除く総合。

(資料) 総務省統計局「消費者物価指数」

図2

名目と実質の為替レート推移



(資料) IMF, Principal Global Indicators (PGI)、BIS(国際決済銀行)HP 図録5072参照